

スーパーグローバル
「在上海日本総領事館 総領事 片山和之先生」の講演を行いました。

2016年6月3日に全学年を対象に、在上海日本国総領事館総領事片山和之先生をお招きして、「日中関係と若者への期待」という題目で講演していただきました。片山先生は、総領事という国を代表する立場で海外に赴き、日々外国との議論や交渉の場に立たれています。そのような立場から、日本と中国のこれからについて、グローバル化した世界で皆さんに期待することなどをお話ししていただきました。

講演後の生徒の感想を以下にまとめました。



中国新聞 平成 28 年 6 月 4 日付朝刊 (備後版)

○先生が最後におっしゃった、「等身大の中国を見てほしい」ということと、「外国語を積極的に学んでほしい」という僕たちへのメッセージが心に残りました。僕は、前から少し、過激な中国の報道が気になっていました。なので、いつの間にか「中国は悪い」という先入観をもっていました。しかし、今回の講演を聴いて、冷静に自分を見ていると、僕の考えはマスコミのもの、自分の考えではないことに気づきました。これからは、マスコミの報道は半信半疑できくようにしたいと思います。また、「外国語を積極的に学んでほしい」というメッセージについては、僕はとても共感できる内容でした。日本の良い所はたくさんあります。しかし、それを世界に発信できなくては、外国に日本の魅力が伝わりません。なので、これから日本の若い人たちは、僕も含め、さらに積極的に外国語を学ぶことが大切だと思いました。(1年生)

○今日の話聞いて、視野を広げることはとても大切だと思いました。日本に住んでいると、どうしても日本中心に世界を見てしまい、視野は一定の広さでしか見ることができません。実際に私も中国のことを批判的な目で見えてしまっています。それはニュースなどで中国のマイナスな面ばかりを報じるからだだと思います。マイナスな面ばかり報じられると、どうしても等身大に見つめることは難しいかもしれません。しかし、人間でもいえるように、嫌なところばかり見つめると嫌いになってしまいます。だから、良いところも見つめるように、ニュースなどの意見ではなく、自分の意見で客観的に見つめようと思います。そのためには外国の方ともコミュニケーションをとらなければいけません。だから、外国語の能力も磨こうと思います。今まで英語は「どうでもいい」と思ってきたけど、全然どうでもよくありませんでした。これからは頑張ろうと思います。片山さんに来ていただいて中国のことについてよく分かりました。日本以外の国についても興味を持っていこうと思います。(2年生)

○今回片山先生の講演を聴いて本当にたくさんのことを学ぶことができたが、1番印象に残っているのは最後におっしゃっていた「広い視野をもつこと」です。私は今はまだ中学生で視野は狭く、まだまだ学ぶべきことはたくさんあるのだと考えさせられました。自分の今の立ち位置に甘んじないこと、外へ、世界へ目を向けていけないといけないと思いました。他にも普段の授業で「外国語能力を高める」こと、「歴史、特に近代史を学ぶ」ことに関してはより一層興味を深め、勉強していこうと思いました。今後自分がどうなりたいか、ということはまだ分からないが、講演を聴いていつか必要になる知識だと分かりました。積極的に学ぼうとする姿勢を持っていきたい。また先生が働かれている中



国についても、マスメディアの情報をうのみにせず、冷静で客観的な視点から考えていくようにしようと考えました。中国に関わらず自分に都合の良いことばかりに目を向けていては成長できないと思います。今回の講演で、実際に世界で働いておられる先生の話から学べること、学ぶべきことがたくさんありました。少しずつでも自分のものにしていく努力をしたいです。(3年生)

○今回片山先生の講演を聞いて、一番心に残ったことは、物事を考える際は、冷静にいろいろな角度から見るのが大切である、ということです。例えば先生は“最近の新聞では中国を批判する内容の記事が多い”と感じ、現地の日本の新聞社の人にそのことについて聞き、自分なりに考えている。“日本人の不安感がそのような情報のニーズをもたらしたことが原因”とする考察には、僕も大変納得させられました。又、ここにある“新聞を読む”という行為、つまり情報(知識)を得るということは、とても重要だと思います。日頃からいろいろな種類の情報を取り入れることで、考えるきっかけや材料を手に入れることができます。僕は体験というのは情報の一種だと思います。しかし、体験は新聞を読んでもニュースを見てもなかなかできません。先生の話にあったように”内向き”ではなく、積極的に外に挑戦していくことが、グローバル化した世界で新たな視点や考え方を探るのに欠かせないと思いました。(4年生)

○片山先生のお話は、日本国内にとどまっていたは聞くことができないようなお話だったので、とても新鮮でした。特に印象に残ったのは、「自分の目で見て相手を理解する」という言葉です。インターネットなどで世界が小さくなっているように思われる今日、その情報だけで「知っている」「理解している」と思いこんでしまっている人が増えているのではないかと思いました。特に中国に関連するニュースについては、片山先生の「日本の人々が暗いニュースを期待しているのでは…？」という言葉にショックを受けました。確かに私自身も中国の良いニュースについてはあまり関心がなく、悪いニュースを聞くと、「やっぱり中国はこれだから…」と思いがちな気がします。グローバルな社会ではいろんな文化・価値観を持った人がいるということを考慮したうえでの相互理解が必要不可欠になると思いました。また、上海と日本のつながりが思った以上に深いもので、これも日本の内側ばかりを見るのではなく、外に目を向けることで初めて知ることができることだと思いました。今回は片山先生の考えを聞いたわけですが、私も自分の意見を持って、それを言うことができる人になりたいと思います。(5年生)

○「等身大の相手を知る」という言葉は、片山先生のお話の中で一番深く考えさせられ、同時に心に深く刺さる言葉でした。私は日々、中国に関するニュースを目にしますが、その内容はどれも中国の悪いイメージを伝えているように感じます。その影響もあり、やはり私の中では中国はそれほどよい国というイメージはありませんでした。しかし、地理の勉強をしていると、たくさんの作物や工業製品は多くが中国製です。そういうところを考えると、実は中国はすごい国なのでは…という思いにもなります。私は等身大の中国を知らないということだと思えます。等身大の相手を知るには、まず自分が主体的になって相手を知ろうとすることが大切になってくるのだと思います。また、客観的に相手を見つめることも重要だと思います。インターネットの普及で、相手の国についての情報を集めることは比較的簡単にできます。だからこそ、隣国として私たち自身が主体的になって相手のことを知ることが国際協力の第一歩となっていくのだと思います。「等身大の相手を知る」ということは、国際関係においてだけでなく身近な人間関係においても重要なことであると言えると思います。これから大学や社会へと自分の世界が広がっていく中で、等身大の相手を知るということを大切にしながら、人とより良い関係を築いていきたいと思っています。(6年生)

